スクールカウンセラー便りに込められたメッセージの分析

初澤　宣子[1)]　　宮部　　緑[2)]　　半田　知佳[2)]　　伊藤亜矢子[3)]

Analysis of the message that school counselors put in newsletters

Noriko Hatsuzawa　　Midori Miyabe　　Chika Handa　　Ayako Ito

1）桜の聖母短期大学　Sakura no Seibo Junior College
2）お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科
Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University
3）名古屋市立大学人間文化研究科
Graduate School of Humanities and Social Sciences, Nagoya City University

要　　旨

本研究では、小中高等学校のSC便りを対象に、SCの意見や意図が表現されているメッセージ性の高い記事に焦点を当て、学校種（発達段階）や発行時期による特徴を明らかにすることを目的とした。計量テキスト分析の結果、小学校は保護者支援、中学校は学習や自己理解、高校は社会的自立に向けた内容が特徴的に抽出された。また、発行時期によって記事の内容は異なっており、特に１学期の５月、３学期の１月の内容が特徴的であった。読み手である児童生徒の発達段階や、行事や季節といったサイクルに応じたメッセージが、SC便りに込められていた。本研究により明らかになった学校種別また発行時期別のSC便りの掲載内容の特徴は、日本のSCが児童生徒や保護者に発信するメッセージとして、SCのスタンスや姿勢を示すものと考えられた。

Abstract

This paper examines the characteristics of developmental stage and publication time from the messages that convey opinions and intentions of school counselors regarding newsletters from school counselors in elementary, junior high, and high schools. These results suggest that elementary school is characterized by parental support, junior high school is characterized by learning and self-understanding, and high school is characterized by social independence. The content of the messages differs depending on publication time, especially in May for the first semester and January for the third semester. The school counselor newsletter contains messages that match the student's developmental stage and the cycle of events and seasons. These findings suggest that the characteristics of school type and publication time of the school counselor newsletter are the messages sent by school counselors to children and parents in Japan as an indication of the school counselor's stance and attitude.

Key words：School Counselor, Psycho-education, School-wide Support, Newsletter

Ⅰ　問題と目的

スクールカウンセラー（以下、SC）便りの発行は、多くのSCが行っている学校臨床活動の一つである。教師とは異なる専門性をもつという意味で「異質」な存在であるSCが学校で機能していく上で、SC便りは重要な情報発信の媒体となっている（上田, 2021）。SC便りは、SCや相談方法の紹介といったコマーシャルとして利用されるだけでなく、心理学的な知識を紹介することで、児童生徒、保護者のメンタルヘルスに貢献することも主要な役割と考えられるようになっている（上田，2021）。近年では、SC便りを通した心理教育的アプローチの実践についての報告も珍しくなくなってきた（黒沢・森・元永，2013；中根・初澤，2014）。また、各地方自治体の発行しているSCガイドラインにおいても、ソーシャルスキルトレーニング等に関する内容を掲載することが、全校児童生徒に対する支援につながるとして（神奈川県教育委員会，2016）、SC便りに掲載する心理教育的な内容の充実が求められている。

小中高等学校のSC便りを収集した初澤・半田（2021）によれば、約7割のSC便りに心理教育的な内容が掲載されていた。「心理学的知識の提供」は、「問題を顕在化している子だけでなく全ての子を対象とし、SCだけでなく教師や子どもも参加する支援のあり方」（伊藤，2010）と定義される「全校型支援」を展開する上で活用可能であるとしている（初澤・半田，2021）。このようにSC便りは、全校の児童生徒に行き渡るものであり、学校のメンタルヘルスの実態に基づき、SCから直接メッセージを伝えることのできる有用な手段であるといえる。しかしながら、これまでSC便りに関する検討は、ほとんど行われてこなかった。特に、多数のSC便りを対象とした量的な分析は試みられていないという課題があげられる。

ところで、学校における便りは、1957年前後に学級経営を目的とした学級通信や（木村，2020）、健康についての情報発信を目的とした保健便りが盛んに発行されるようになったことから始まった（佐藤・小浜，2011）。学級通信や保健便りの発行にあたっては、対象者のレベルや興味関心に合った内容や、年間の行事や季節のサイクルを踏まえた内容を考慮することが望ましいとされる（糟谷，2021；鎌塚・林・鈴木・下村・井澤，2016）。これらの研究は、情報発信媒体としての日本の学校における便りの特徴を示すものといえよう。しかし、SC便りに関して、発達段階や発行時期を視野に入れた検討は見られない。仮に、SC便りについても学校種や発行時期という視点から掲載事項の特徴を分析できれば、対象者やサイクルに応じたSC便りに込められたメッセージを明らかにすることができ、SC便りに掲載された心理教育的な内容の体系的な理解につながると考えられる。

そこで本研究では、小中高等学校のSC便りを対象に、SCの意見や意図が表現されているメッセージ性の高い記事に焦点を当て、学校種別また発行時期別の特徴を明らかにすることを目的とする。本研究により、多くのSCが便りに込めたメッセージを明らかにすることで、SCの姿勢やスタンスを考察し、SC便り作成に関する実践知の蓄積を目指す。

Ⅱ　方　　法

1．SC便りの収集過程

Web上に公開されている2014～2016年度内発行のSC便りについて、検索エンジン「Google」を用いて以下の手順で収集した。①学校種3種（小学校・中学校・高等学校）×表題6種（SC便り・教育相談便り・相談室便り・SC通信・教育相談通信・相談室通信）の計18通りのキーワードで検索した。②各学校種の累積が30校分になるまで収集した。ただし、高等学校（以下、高校）では、“通信”というキーワードを用いると“通信制高校”が相当したため、表題を6種のうちから“通信”を含まない3種に限定し、再度検索した。なお、本調査では小中及び中高の一貫校を除外した。また、発行者がSCと明記されているものを対象とした。収集時期は、2017年3～4月であった。

以上の手続きにより、最終的な分析対象は、小学校135通（30校、SC36名）、中学校212通（30校、SC35名）、高校67通（17校、SC19名）の計414通（77校、SC90名）であった。詳細については、初澤・半田（2021）を参照されたい。

2．分析手続き

初澤・半田（2021）の手続きによって得られた20項目７分類（「SCの情報」「SCの活動内容」「相談室の利用方法」「相談の予約方法」「心理学的知識の提供」「お知らせ」「その他」）のうち、「心理学的知識の提供」に分類された文章を分析対象の記事とした。記事の特徴を量的に捉えるために、計量テキスト分析を行った。

計量テキスト分析とは、「インタビューデータなどの質的データをコーディングによって数値化し、計量的分析手法を適用して、データを整理、分析、理解する方法」とされる（秋庭・川端，2004）。本研究では、分析対象の記事をデータとして、どのような単語が特徴的に見られるかについて整理･分析することで、SC便りに込められたメッセージを理解することを試みる。

結果と考察

計量テキスト分析には、フリー・ソフトウェアKH Coder 3（樋口，2014）を用いた。データを概観した上で、表記の揺れ（漢字・平仮名表記、誤った表記等）を可能な限り統一または修正し、未知語、組織名、人名、地名、感動詞、ナイ形容詞、否定助動詞は分析対象から除外した。また、KH Coder 3には代名詞を抽出しないといった特徴があることから、「私」「私たち」「僕」「僕たち」を強制抽出する語に加えた。さらに、複合語を検索し、「子供たち」「自分自身」「スクールカウンセラー」「学校生活」「スマホ」「相談室」「人間関係」「心理学」「レジリエンス」「生活リズム」「自己肯定感」「部活動」「保護者」「五月病」「価値観」「集中力」「肩甲骨」「自己主張」「来室」「ダブル・バインド」「エゴグラム」「投影同一化」「スモールステップ」「バラスト」「スマートフォン」「臨床心理士」を強制抽出する語に設定した。

1．学校種に関する分析結果

分析対象の記事すべてについて、総抽出語数45,331語、異なり語数5,474語が抽出された（出現回数平均8.28、標準偏差50.32）。

まず、学校種別に特徴的な語を明らかにするため、出現回数50回以上の単語について対応分析を行った（図１）。対応分析では、２次元プロットにおける単語と変数との布置を見ることで、各変数において特徴的な語を読み取ることができる（樋口，2019）。出力の結果、小学校段階のSC便りには「子供たち」「子供」「親」「成長」という単語が特徴的に抽出された。こうした子どもの成長に関する内容を掲載することは、保護者支援を意図したメッセージであると推察される。小学校の発達段階は、大人の関わりが子どものメンタルヘルスに影響するため、学校臨床活動においても保護者への働きかけが求められる（黒沢ら,2013）。SC便りにおいても「親」が「子供」「子供たち」の「成長」に気づき、見守ってほしいというメッセージが込められていると考えられた。中学校段階のSC便りには「記憶」「練習」「覚える」という記憶術に関する単語、「私たち」「私」「知る」という自己に関する単語が特徴的に抽出された。中学校の発達段階は、定期試験による学力差の顕在化や（中山，2008）、自己の在り方への意識の高まりがメンタルヘルスに影響する（佐藤・西村，2013）。SC便りに記憶術や自己に関する内容を掲載することで、生徒が自分に合った学習方法を見つけたり、自己理解を深めたりしてほしいというメッセージが込められていると考えられた。高校段階のSC便りには「緊張」「ストレス」「仕事」という単語が特徴的に抽出された。高校の発達段階は、社会的自立とともに、自らのメンタルヘルスの保持増進も課題となる時期である（佐藤・西村，2013；文部科学省，2021）。SC便りにおいても、生徒が自分の「緊張」や「ストレス」を調整することや、将来の「仕事」を意識することに寄り添うようなメッセージが込められていると考えられた。

次に、学校種別の単語の共起関係を見るため、出現回数50回以上の単語について共起ネットワークを出力した（図２）。共起ネットワークは、「データ中に多く出現していた語を確認するとともに、語と語のつながりからデータ中のトピックないしテーマを探索できる便利な手法」（樋口，2019）である。出力の結果、小学校と中学校は「思う」、中

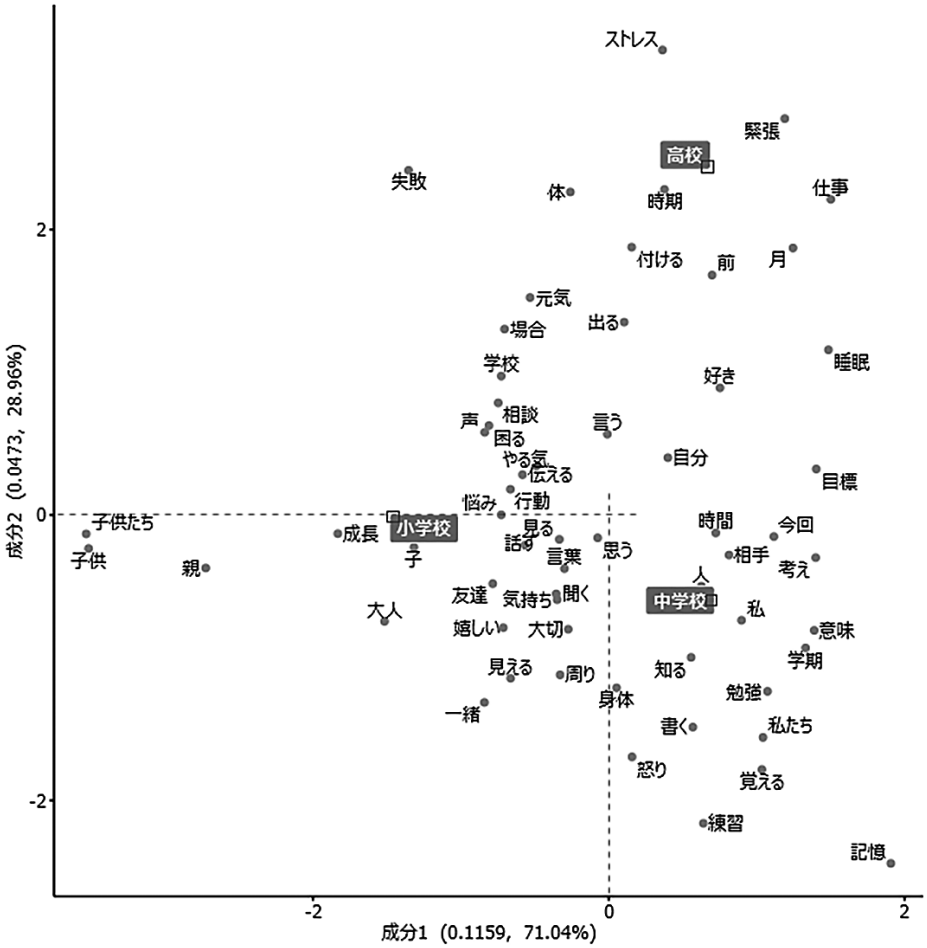

図１　学校種を変数とした２次元プロット

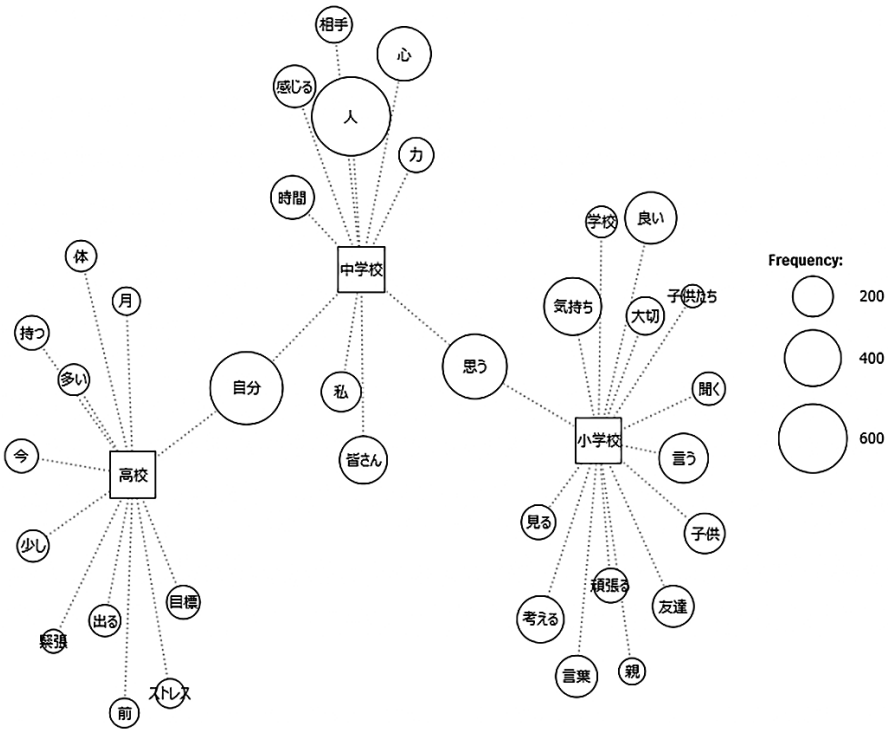

図２　学校種間の共起ネットワーク

学校と高校は「自分」でつながっていたが、小学校と高校間はつながりが見られなかった。共起ネットワークでは出現パターンの似通った語が、共起の程度が強いとして線で結ばれることから、小学校と中学校間また中学校と高校間で、それぞれ関連するトピックが扱われていると考えられた。また、共起ネットワークでは出現数の大きい単語ほど大きな円で描画されるが、小学校では「気持ち」「良い」「言う」、中学校では「人」「心」等、大きな円が見られたのに対し、高校では円の大きさに顕著な差は見られなかった。小学校で抽出された「気持ち」「良い」「言う」という単語は、子ども個人の基本的な行動を具体的に示す表現であり、中学校で抽出された「人」「心」という単語は、小学校段階よりも抽象度が高く、他者の存在や他者との関係が連想される表現であった。また、小中学校のSC便りでは、特定のテーマが扱われる傾向にあるのに対し、高校のSC便りではテーマが分散していることが示唆された。義務教育段階である小中学校と異なり、高校は各学校における特色化・魅力化が進められている（文部科学省，2020）。SC便りの内容に関しても、SCが各学校の特色を踏まえ、読み手である生徒に合わせたメッセージとなるように工夫していたと考えられる。

2．時期に関する分析結果

続いて、分析対象の記事のうち、発行時期が不明、検索されたSC便りが２つのみであった８月分を除いた記事について、総抽出語数41,104語、異なり語数5,217語が抽出された（出現回数平均7.88、標準偏差46.43）。

発行時期による特徴を明らかにするため､学期と月を変数として､出現回数40回以上の単語について対応分析を行った（図３）。月別の頻出語について、それぞれ上位10語のJaccardの類似性測度を表１に示す。出力の結果、１学期の中で最も特徴が見られた月は５月、あまり特徴が見られなかった月は６月であった。月別の頻出語について、５月

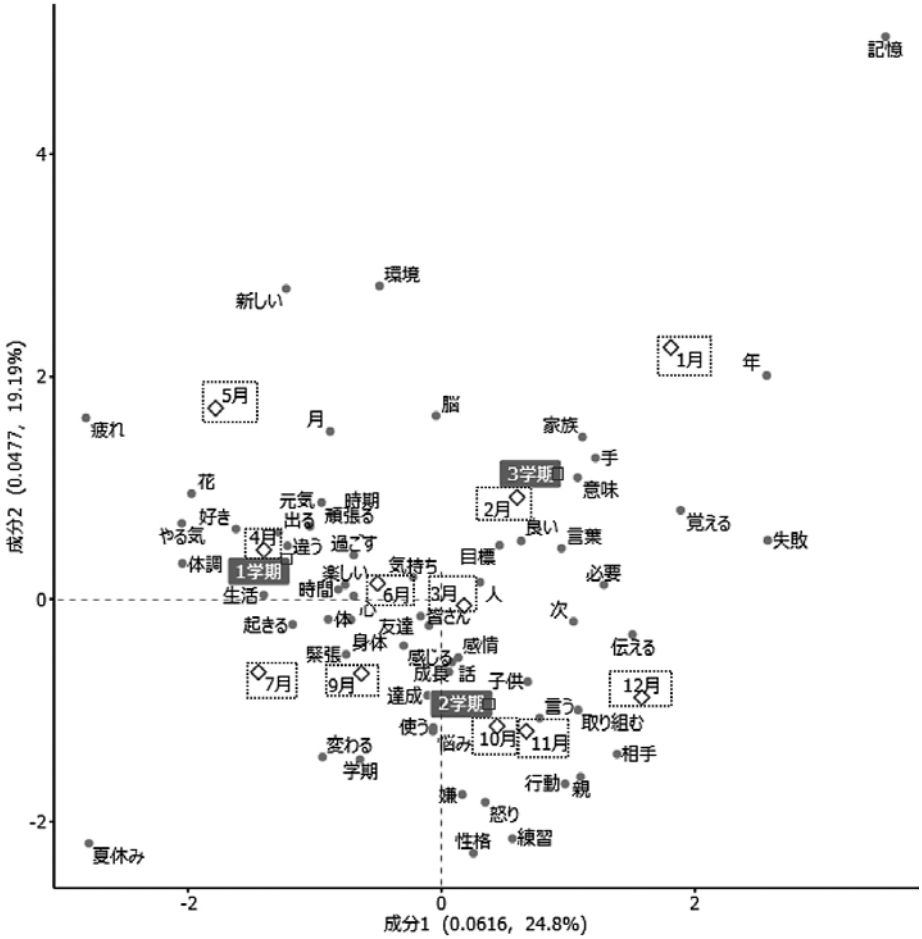

図３　学期×月を変数とした２次元プロット

表１　月別の特徴語（上位10語）一覧

4月		5月		6月		7月	
受け止める	.045	心	.052	自分	.059	思う	.057
カウンセリング	.044	人	.051	思う	.053	夏休み	.054
気持ち	.039	時間	.043	良い	.045	人	.054
新しい	.039	頑張る	.040	友達	.044	自分	.052
期待	.035	月	.038	皆さん	.040	目標	.042
好き	.033	出る	.036	心	.038	心	.042
思う	.033	新しい	.035	楽しい	.030	皆さん	.035
中学校	.031	やる気	.034	顔	.028	花	.032
皆さん	.029	五月病	.034	力	.028	やる気	.031
子供	.029	学校	.029	持つ	.028	体	.031
9月		**10月**		**11月**		**12月**	
自分	.072	心	.038	自分	.067	人	.057
気持ち	.069	言う	.035	思う	.054	言う	.053
皆さん	.046	皆さん	.032	言う	.054	友達	.042
頑張る	.034	大切	.030	相手	.053	親	.038
大切	.034	感じる	.028	感じる	.046	子供	.037
子供	.033	友達	.026	気持ち	.045	考える	.036
夏休み	.032	うわさ	.025	考える	.042	大切	.031
時間	.029	使う	.025	心	.041	話	.029
出る	.027	身体	.024	行動	.037	失敗	.028
力	.025	気	.024	時間	.035	聞く	.027
1月		**2月**		**3月**			
人	.070	言葉	.079	人	.061		
良い	.056	自分	.051	皆さん	.061		
自分	.055	気持ち	.047	心	.061		
思う	.051	良い	.039	子供	.051		
考える	.039	今	.036	良い	.040		
記憶	.037	伝える	.030	持つ	.037		
目標	.035	友達	.030	折れる	.037		
家族	.033	月	.024	思う	.036		
年	.033	多い	.023	気持ち	.035		
見る	.030	私	.022	新しい	.032		

は「新しい」「やる気」「五月病」が抽出された。６月は他学期の月と同様の語が抽出されたことから、対応分析では中心に布置されたと考えられる。その他の月では、４月は「カウンセリング」や「受け止める」といった相談活動に関する語、７月は「夏休み」といった長期休業に関する語がそれぞれ特徴的に掲載されていた。１学期は、様々な変化に伴う節目の時期とされ、成長の機会であると同時に変化に伴う疲労や不登校等も生じやすい時期である（田中, 2000；福島県教育委員会, 2014)。SC便りにおいても、１学期は「五月病」の語が見られたように、生活上の変化等により環境に適応できずにいる児童生徒が、疲労を感じる場合も想定したメッセージを発信していることが示唆された。

２学期は、他学期と比べると特徴的な月はあまり見られなかった。月別の頻出語について、９月は、７月と同様「夏休み」が抽出されており、長期休業の前後で類似した内容を扱っていることから、対応分析では近い布置となったと推察される。10月と11月は「言う」「感じる」が共通して抽出されており、対応分析で非常に近い布置になったと考えられる。12月は「言う」だけでなく、「話」「聞く」も抽出された。２学期は、月日が経つにつれて学校生活が充実していく時期であるとされる（藤原, 2005)。SC便りにおいても、２学期はいずれの月も自他理解に関する内容であったことから、集団活動の時間が長くなる中で対人関係の発展を支えるようなメッセージを発信していると考えられた。

３学期の中で最も特徴が見られた月は１月、あまり特徴が見られなかった月は３月であった。月別の頻出語について、１月は「記憶」といった学習に関する語、「目標」「年」といった年始に関する語が抽出された。３月は先述した６月と同じく、他学期の月と同様の語が抽出されたことから、対応分析では中心に布置されたと考えられる。そして、２月に「言葉」「伝える」といった自己表現に関する語が抽出された。３学期は、受験や期末考査の集中する時期で

あるとともに、クラス替えや卒業、異動といった別れの時期でもある。SC便りにおいても、学習に関する心理学的助言や、自分の思いを「言葉」にして「伝える」自己表現に関する内容をメッセージとして発信していると推察された。

以上のように、SC便りには発行時期によって特徴的な内容が見られた。学校臨床活動では、時期を捉えて「現実的な環境調整」を行うことで子どもの心理的な安定が図られるとされており（宮部・半田・初澤・永江・伊藤，2017）、SC便りにも時期に合わせたメッセージが込められていると考えられた。

総合考察

1．本研究のまとめ

本研究の目的は、小中高等学校のSC便りを対象に、SCの意見や意図が表現されているメッセージ性の高い記事に焦点を当て、学校種別また発行時期別の特徴を明らかにすることであった。

まず、分析対象の記事すべてについて学校種別に分析した結果、小学校では保護者支援、中学校では学習や自己理解、高校では社会的自立に向けた内容が特徴として抽出された。SC便りの内容が学校種別によって異なるという結果は、SC便りの主題をKJ法（川喜田，1967；1970）によって分析すると、発達上の課題や変化に応じた特徴的なカテゴリが見られるという初澤・半田（2021）の結果と概ね一致していた。心理教育的アプローチを含め学校臨床活動を展開するにあたっては、学校種の特徴が前提となるとされる（黒沢ら，2013）。本研究により、学校種によって掲載されていた心理教育的内容が異なっていたこと、特に小中学校においては特徴的なテーマが掲載されていたことから、SCはSC便りにおいても学校種の特徴を踏まえたメッセージを込めていると考えられた。

続いて、発行時期が不明及び検索されたSC便りが2つのみであった8月分を除いて、学期と月を変数として対応分析をした結果、学期また月ごとに異なる特徴が見られた。これまで学級通信や保健便りにおいて、行事や季節のサイクルを踏まえた内容を掲載することが報告されていたが（糟谷，2021；鎌塚ら，2016）、SCも他の便り同様にSC便りの内容を工夫していることが明らかになった。

日本のSCは、教育職を基本とする諸外国のSCと比べて、心理教育的アプローチのような集団に向けた発信型の活動は少ない。そうした中で、便りという日本の学校文化を活用する形で発信を行い、発達段階や発行時期に応じた内容を工夫することで、児童生徒や保護者の潜在的なニーズに応えていると考えられる。便りという控えめで侵襲的でない情報発信媒体を用いて、子どもや保護者に寄り添う姿勢を示しながら、心理学的な知識の普及や相談への親和性を高める役割を積極的に担うSCのスタンスが、本研究の結果には特徴的に示されている。

また、本研究では、SC便りにおける学期別また月別の掲載事項が整理された。それらには、学校臨床活動において、ある程度一般性のある各時期の支援ニーズが反映されていると考えられ、今後のSC便り作成の一助となることも期待される。

2．今後の課題

本研究により、これまでのSC便りの特徴を可視化し、便り発行に関する実践知を蓄積し、SCが便りを作成する際の参考資料が得られた。しかしながら、本研究には次の課題が残されている。第一に、分析対象をWeb上に公開されていたSC便りに限定していた。SC便りに込められたメッセージをより詳細に検討するためには、面接等によりSCに直接、発行の意図や工夫をたずねる必要がある。第二に、2020年に始まった新型コロナウイルス感染症の蔓延による緊急事態宣言や、それに伴う長期的な臨時休校により、SCによる学校臨床活動も大きく変化した。SC便りに込められたメッセージも変化したと考えられ、臨時休校下や学校再開後に発行された便りを収集し、その特徴を検討することが必要である。

文　献

1）秋庭裕・川端亮（2004）．霊能のリアリティへ――社会学、真如苑に入る　新曜社

2）藤原幸男（2005）．２学期制導入の現状と課題，琉球大学教育学部紀要，*67*，119-128．

3）福島県教育委員会（2014）．不登校対応資料Vol.4 手をたずさえて　福島県教育委員会http://210.248.177.131/img/kyouiku/attachment/900694.pdf（2021年11月23日）

4）初澤宣子・半田知佳（2021）．スクールカウンセラー便りを活用した全校型支援の模索――小学校・中学校・高等学校における各掲載事項の分析から，学校教育相談研究，*31*，34-43.

5）樋口耕一（2014）．社会調査のための計量テキスト分析――内容分析の継承と発展を目指して　ナカニシヤ出版

6）樋口耕一（2019）．計量テキスト分析における対応分析の活用――同時布置の仕組みと読み取り方を中心に，コンピュータ＆エデュケーション，*47*，18-24.

7）伊藤亜矢子（2010）．全校型支援を行うスクールカウンセリングの理論的検討(1):全校型支援をめぐる現状と課題，日本教育心理学会総会発表論文集，*52*，721.

8）神奈川県教育委員会（2016）．スクールカウンセラー業務ガイドライン

9）鎌塚優子・林典子・鈴木恵子・下村淳子・井澤昌子（2016）．小学校における養護教諭の保健だより作成の実態，静岡大学教育学部研究報告人文・社会・自然科学篇，*66*，225-238.

10）糟谷知香江（2021）．心の健康をテーマとした保健だよりの作成を通しての学び：養護教諭養成課程における実践報告，聖路加国際大学教育実践論集，*1*，20-39.

11）川喜田二郎（1967）．発想法　中央公論社

12）川喜田二郎（1970）．続・発想法――KJ 法の展開と応用　中公新書

13）木村学（2020）．学級通信の期限とその変遷――「日本作文の会」機関紙『作文と教育』の分析を中心に，文京学院大学人間学部研究紀要，*21*，135-142.

14）黒沢幸子・森俊夫・元永拓郎（2013）．明解！スクールカウンセリング：読んですっきり理解編　金子書房

15）中根由香子・初澤宣子（2014）．心理教育のツール，国際比較による東アジア型スクールカウンセラーの全校支援モデルとツールの構築（ツール集），34-45.

16）中山勘次郎（2008）．知識理解をベースとした心理教育の意義について，上越教育大学研究紀要，*27*，85-95.

17）宮部緑・半田知佳・初澤宣子・永江優衣・伊藤亜矢子（2017）．スクールカウンセリングの前提となる学校の諸要素を抽出する試み，お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要，*19*，35-47.

18）文部科学省(2020)．これからの高等学校教育について　文部科学省https://www.mext.go.jp/content/20201124-mxt_koukou02-000011165_03.pdf（2021年11月23日）

19）文部科学省（2021）.「生きる力」を育む高等学校保健教育の手引き

20）佐藤佳代子・小浜明（2011）.「保健だより」に関する一考察――雑誌『健康教室』に掲載された保健だよりの機能の推移と1987・2010年の政策実態に関する比較，仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集，*12*，51-58.

21）佐藤仁美・西村喜文（2013）．改訂版思春期・青年期の心理臨床　放送大学教育振興会

22）田中久美子（2000）．成長の節目を生かした習慣の改善法――進学・進級の時期に生活を見直す，児童心理，*54*，148-154.

23）上田勝久（2021）．スクールカウンセラー便り，心理臨床の広場，*14*，24-25.

付　記

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。なお、本論文は、2019年度第38回日本心理臨床学会にて発表した内容に、データを追加して再分析したものである。